

rongorongongo

題字の背景画像は rongorongongo の文様から作成したものです

茨城キリスト教大学
文化交流学科

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科 〒319-1295 茨城県日立市大みか町6-1-1 TEL 0294-52-3215 FAX 0294-52-3493

入学 記念 行事

ケニアの人に
インタビュー

◆ケニアやラトビアなど
あまり見かけない国籍の
人も多くて、プレゼン



ブラジルのサミールさん 左後ろにフィリピンのラニさんとケニアのマカンジさん

文化交流学科が毎年実施する入学記念の一泊旅行に新
入生全員が参加、学科の教員や交換留学生とともに文化
交流を体感した。

5月8日はつくばエキスポセンター、9日は話題の茨
城空港を見学した。

イベントの中心は、8日午後の文化交流研修会。つく
ば市在住の外国人の方々や本学に学ぶ留学生に、数名の
グループでインタビューをし、全体の前でプレゼンする
活動を行った。基礎演習単位のゲーム対抗戦は非常に盛
り上がった。参加者の感想を紹介する。

の発表会も楽しかったで
す。

日本では当たり前だっ
たりすることが向こうの

人々には驚きであつた
り、失礼であつたり……
というのも勉強になりま
した。私はケニアの人に
インタビューしたので
が、本物のアフリカ人と
話すのは初めてだったの
でいい経験になったと思
います。

外国人と初めて交流

◆私はブラジルの人と交
流をしたのですが、すぐ
く日本語がうまく驚き
ました。また、初めて
の外国人との交流だつた
ので、不安でしたが楽し
かったです!!

これからいろいろな国
の人と交流したいです。
せっかく学べているの
にもったいない

◆ケニアのゲストの方に
「なぜ英語をもっとたく
さん勉強しないのか」と

【6面へ続く】

文化交流論ゲストトーク

青年海外協力隊・嶋原早喜さん、写真家・内藤順司さん

文化交流学科一年生の必修科目「文化交流論」では、
毎年ゲストに特別講演をお願いしている。

今年は、第一弾を、青年海外協力隊員としてボリビア
で活動してきた嶋原早喜さん（本学食物健康科学科助手
にお願いした。（4面参照）

第二弾は、スビッツ、浜田省吾、夏川りみなどのオフィ
シャルフォトグラファーをつとめる写真家・内藤順司さ
ん（写真）に、「海外で活動する日本人を私はなぜ撮る
のか？」というテーマでお話しいただいた。

内藤さんは多くの著名なミュージシャンの写真を撮る
仕事と並行して、エコロジー関連の取材や、カンボジ
アの戦乱で失われた伝統的絹織物を復興した森本喜久男
氏、外務省の医務官から転身してスーダンで現地の地域
医療に活躍する河原尚行医師などを撮影。

今回のゲストトークは、本学図書館で6月いっぱい行
われた写真展「甦るカンボジア―伝統織物の復興から「暮
らし」と「森」の再生に至るまで」とリンクして実現した。
『もう一つのスーダン―日本人医師河原尚行の挑戦』（主
婦の友社）参照。

以下に、学生の感想を紹介する。

◆日本が失ってしまった
ものがある
◇カンボジアやスーダン
で活躍している日本人の
方々が本当に素晴らしい
見えた。日本が失つてし
まったものがスーダン・
カンボジアにはある、と
いうことが少しだけでも
理解できた。自分も何で
も良いので何か役に立つ
ことをしてみたいと改め
て感じた。

◆日本は豊かだけれども
◇数々の写真を見て、第
一印象は今の自分たちの
生活よりも豊かに思っ
た。今の日本の生活はモ
ノの面では豊かだけれど
も、心の奥底には寂しい
ものがあると思う。忘れ
ていた事を思い出させら
れた。

◆内藤順司さん講演会
1・6面
◆入学記念行事
2・3面
◆交換留学生は語る
3面
◆アジアン教育ボランティア
4面
◆青年海外協力隊体験談
7面
◆ボランティアサポート基金
8面
◆学業優秀賞
◆ICサポーターズ

◆先進国と発展途上国と
心の大きさの違い

10年7月号目次



交換留学生 日本での暮らし 日本文化を語る

日本の文化について 深い印象を与えた

天津師範大学 廉慧賢



IKTT の織物
内藤順司氏撮影 (部分) 1面参照

知らず知らずのうちに日本に来て2カ月を越えた。日本に来たばかりの頃、日本の学生が私たちを連れて、日立の桜祭りを見て、私たちは写真を撮ったり、踊りを見たりした。その体験は本当に面白かった。日本の文化について深い印象を与えた。

この2カ月の中で新入生記念行事とか、バス旅行とか、いろいろな活動があった。先週、私たちはカナダの留学生と一緒に

に東京デイズニールンダへ行った。私は帰国してから絶対的にこれを出す事が出来ると思う。新入生記念行事の時に、別の国の留学生を見たことがあった。自分の国を紹介して、ゲームをして遊ぶ。私にとって、最も深い印象は国際性である。タジキスタンの友人もいた。同じムスリムなので、彼に会えた時に特別に親しみを感じる事ができた。それから今、私はバイトをしている。初めてバイトしたら自分がどれだけ不器用なのかとしみじみと感じた。最初の一期はミスばかりだった。やはり、物事はやるのが思うより難しい。現在ほとんどん慣れてきた。最後、感謝を言いたい。国際交流部の先生とICの学生は私たちがキャンパス生活に対して困った時に助けてくれて、本当にありがとうございます。

今年も中国の天津師範大学、韓国の明知(ミヨンチ)大学校、韓瑞(ハンソ)大学校からの交換留学生が本学の学生と机を並べて学んでいます。5月にはカナダのファンシヨール大学から2名が一月ほど滞在しました。秋には米国オクラホマクリスチャン大学から十数名の交換留学生もキャンパンで学びます。

日本のことを もっと知りたい

天津師範大学 張辰嬌

知らず知らずに3か月が経った。最初はここの生活になかなか慣れなかつたけれども、国際交流部の先生たちのおかげで段々落ち着いてきた。そして、バデイのみなさんも熱心に色々な事を教えてくれて、私たちが

命自分の意思を相手に何となく伝えられた時はすごく嬉しかった。時間は確かにはやいものである。ただ3か月といても、色々なことが体験でき、日本の方々に会って、実にたくさん勉強になり、大変楽しく過ごしてきた。

実際の生活で 分かること

韓瑞大学校 金貌螺

アンニョンハセヨー！ 韓国の韓瑞大学の金貌螺(キムモラ)です。今回のロンゴロンゴを通じて皆と会えて嬉しいのです。日本へ来てからもう2ヶ月が経ちました。初めてこちらへ来た時はすべてのものが韓国とは違うので、とても迷いましたが、今はこちらでの生活にますます慣れますが、ほとんどの日本人によって違うと思



張辰嬌さんと廉慧賢さん

人は自分の本音を見せないと聞いたので、軽く話をかけるのが大変でしたが、多くの人々が親切にしてくれて助かりました。

日本については教科書で学んだことしか知らなかったのですが、実際に生活をしてみたら難しいことも多いし、意外と韓国と違うことも多いと思っています。韓国では大衆交通費が安いので、自転車に乗る人があまりいないのですが、ここでは20代の女性やスーツを着た会社員たちが自転車に乗る姿が良く見られて、びっくりしました。そして茨

城には自分の車を持つている学生たちが多し、また、学生が車を持つていないことが贅沢だと思われるので、私も韓国に帰ると自分の車が欲しいと思うようになりそうです。

最近では授業や生活には、ほとんど慣れましたが、まだ気安く付き合っている日本人の友達はいなくて少し寂しいです。皆と親しくなつて美味しいものを作ったり、たまには飲みに行ったりして楽しく過ごしたいから、いつでも話かけてください！ これからもよろしくお願いします。



具珉徹くん、李世伶さん、金貌蝶さん

日本の先進文化を学ぶ

明知大学校

具珉徹

韓国で日本語と経営学を勉強した私は近くて遠い国、小さいけれど強い国日本に対して関心が高まりました。それで2年前、私は日本全国をバックパック旅行したことがありました。その時、日本を見ながら日本に対して、もうちょっと知りたくなりしました。似ていな

韓国で日本語と経営学を勉強した私は近くて遠い国、小さいけれど強い国日本に対して関心が高まりました。それで2年前、私は日本全国をバックパック旅行したことがありました。その時、日本を見ながら日本に対して、もうちょっと知りたくなりしました。似ていな

海まで歩いて行けることがとても幸せです

明知大学校

李世伶

私は韓国の明知大学校から来た4年生のイセリョンと申します。ここに来ることにしたのは日本語だけ勉強するのではなく、実際に日常生活の中で日本語を使いながら日本という国についてもっと知りたかったからです。ここに来て2カ月ぐらいですが、私は今、本当に私が期待したとお

私は韓国の明知大学校から来た4年生のイセリョンと申します。ここに来ることにしたのは日本語だけ勉強するのではなく、実際に日常生活の中で日本語を使いながら日本という国についてもっと知りたかったからです。ここに来て2カ月ぐらいですが、私は今、本当に私が期待したとお

私を感じた韓国と一番違う点は、人間関係です。日本人はとても個人的で警戒心が強くて、他人に簡単に心を開かないようです。韓国人たちは易しく友達になるのに、日本で友達を作ることはそれほど難しいですね。それでも多くの学生たちが友達になってくれてありがたいです。

私を感じた韓国と一番違う点は、人間関係です。日本人はとても個人的で警戒心が強くて、他人に簡単に心を開かないようです。韓国人たちは易しく友達になるのに、日本で友達を作ることはそれほど難しいですね。それでも多くの学生たちが友達になってくれてありがたいです。

今年も行きます

カンボジア教育ボランティア

ことしで7回目になります。カンボジアの首都プノンペンからベトナムのホーチミンに続く国道1号線を1時間ほど走り、メコン川をフェリーで渡ってしばらく走ります。国道からわき道にそれてどこまでも続く田んぼのなかを進むと「カンボジア日本友好学園」につきま。

映画『キリングフィールド』の主人公とまるで同じような体験をしたジャーナリストのコン・ヴォーンさん(写真)が日本で難民として20年近く暮らしてから祖国に設立した中等高等学校です。日本のグループなどが様々な形でサポートして運営されています。

カンボジアの学校は秋が新学期ですが、ICのボランティアグループが日本語・英語の特別授業をするよ！と秋からの入学が決まった生徒たちに知らせておいてもらおうと、大勢の生徒が授業を受けに来てくれます。300人くらい。2週間、40時間ほど授業を行います。

ことは、文化交流学科、現代英語学科、児童教育学科の23名の学生が参加します。子どもたちや村の人達との交流も面白いですが、友好学園を卒業した大学生にもアシスタントとして参加してもらおうので、学生同士の交流も大きな魅力になっています。

また、学園祭アジアン・バザールとも連動しています。詳細は本紙次号で。〔藤田悟 文化交流学科教員〕



そしてここに来て気に入ったのはここ茨城の生活です。韓国で私が住んでいた首都圏ではなかなか見れない庭のある住宅を見れることや、歩いて海まで行けることがとても幸せです。きれいな花たちをよく手入れしながら自然と調和して生きていくことを大切にしている人たちの生活が、最近どんどん発展だけを見ながら進んでいる今の社会にとつて見習う価値があると思います。

4月に見に行つた日立の祭りも印象的でした。1年にみたくない短い期間ですが、私はここにいる間に、私はいかにしたいですか。いろいろな人たちに会いながら私とは違う文化を体験し、日本のほかの町に行つて日本での大切な思い出を作りたいです。これからも私に果たしてこの貴重な機会を生かして頑張りたいと思います。

青年海外協力隊体験談 を聞いて

嶋原早喜さんは本学を卒業後、青年海外協力隊員として南米のボリビアに派遣され、栄養士として活動した経験を持つ。

文化交流論の時間に、ボリビアでのボランティア活動や異文化体験について語ってもらった。以下に学生の感想を紹介する。(写真+キャプション、嶋原さん)

料理の仕方を知ることの大切さ

◇ボリビアの話はとても魅力的でした。特に塩の湖はぜひ雨季も乾季も見てみたいと思いました。更に、その塩を使った料理もしてみたいし、食してみたいです。

ただ、失敗した料理のような丸コゲの魚が写真で出された時には驚きました。まさかあのようなものを食べているなんて、見ているだけで胃もたれがしそうです。

最後に、食べ物が豊富にあったとしても、料理の仕方を知らないということが問題になり得るんですね。JICAは飢餓のみを問題視していると思っていました。しかし、調理法を知らないという

ことも問題になるのだと気づきました。

子どもの栄養面でのケア

◇派遣されて行った所の高地での生活(酸素ボンベ)には驚きました。ま

た、子どもの栄養面のケアについて現状が聞けて勉強になりました。日本は離乳食も豊富だから、なかなか自分で作って食べさせることは少ないし、母親への指導も充実しているが、途上国は知識も少なく、間違つた知識で子供に食事を与えているというのは、現実を見せられたように感じました。

た、子どもの栄養面のケアについて現状が聞けて勉強になりました。日本は離乳食も豊富だから、なかなか自分で作って食べさせることは少ないし、母親への指導も充実しているが、途上国は知識も少なく、間違つた知識で子供に食事を与えているというのは、現実を見せられたように感じました。

街の中で走れない

◇ボリビアについては、名前しか知らなかつたので、実際に行った方の話を聞いてとても良かった。富士山の頂上より少し高い場所にビルが沢山あってラパス市のような街があるのはびっくりした。でも空気が薄くて街の中で走れないのは不便というより不思議な感じがした。

最後のスライドに写っていた塩の湖や風景がとてもきれいだつた。

ことができた

◇ボリビアという国は知っていたけど、どのような生活をしているのかとか食べ物とか習慣などは全く知らなかつたので、話を聞いてとてもよかったです。異国に行くことは、自分自身の成長につながるから自分も異国に行つてみたいです。

疑問や興味がさらに深まった

◇青年協力隊についてはもともと興味があり、将来は参加してみたいと思つていたのでとても興

味があつた。食べ物について充実していたことにはびっくりしたし、スーパーマーケットみたいなところで、同じ種類の果物がおいてあつた時は、充実していいなと思つた反面、寒い(標高が高い)のにどうやって育てているのであろうと思つた。

また水が飲めるのか疑問に思つた。またすべての料理をから揚げにして食べていたので油っこくないのかと思つた。高いところにいた人が下に降りてまた上にあがつたらどうなるのか気になつた。

もし自分がそついう状況になったら

りてまた上にあがつたらどうなるのか気になつた。

◇知らない土地で、他の国の言葉で現地の人々と分かり合うというのは凄いことだと思つた。標高の高いところで生活していくのは体力的にも大変だろうし、もしも自分がそついう状況になつたらすぐに投げだしてしまいそう。

でも、塩の湖は見たい!



標識もなく運転手は遠くに見える景色と方位磁針を頼りにひたすら走る



乾ききつた塩湖に自然のアートが広がつた



塩湖に雨がたまると世界一大きな鏡になる

【1面 内藤順司さん 続き】

れた気がしてよかったです。

同じ日本人が頑張っている

◇スーダンではマラリアに感染していたり、水質の汚染があったりで、豊かではないんだと思っただ。そういう問題はスーダンだけでなく世界各国で起っていて、それを手

助けしている同じ人間、同じ日本人が今もどこかで頑張っていると思うと、自分にも何か出来るのではないかと思つた。

最後のスライドショー

ではとても感動した。なによりも病気や不安定な状況の中でも輝いていた笑顔があつてよかつた。

本当の豊かさは何か

◇私の住む日本は物資や経済的には恵まれていま



図書館での写真展の展示作業を指揮する内藤さん。図書館サポーターが活躍した。

すが、彼ら（写真に写つていた現地の人々）のキラキラしている瞳を見て、本当の豊かさとは？

彼らの不幸は本当に不幸なのか？ 色々考えたいです。

自分があそこに住んでいたら

と考えさせられました。彼らは病気であつたり貧しいけれどとてもまぶしく輝いていたように見えて、胸がキュンとしました。

笑顔を輝いている

◇私たちの国では、最新医療技術など、たくさん発展しているが、一方で、スーダンやカンボジアではちゃんとした治療を受けられない人がたくさんいると知り、貧富の差の激しさを思い知らされた。でも、写真の中の子供たちは笑顔だったことに不思議に思つた。

ぜひまたお話を聞きたいです。ただ一方的な見方をするのはなく、世界を多面的に見ていきたいとも思いました。私にとつてのふつうとは、果たしてふつうなのか？

写真を見て、心からの笑顔とか、周りの人や家族との絆を、豊かさ引き換えに失つてしまつたような気がします。

自分がスーダンやカンボジアに住んでいたら、あんな風に笑えるのだろうか…。今日の授業で自分の生活を見直してみようと思つた。

講演に感動・共感

◇外国で活躍している日本人のことを知ることができて良かった。子供たちの写真も多いし、笑顔の子も多かったけど、病気で苦しんでいる子もいて、胸が痛んだ。日本は「豊かさ」を手に入れたが、支えあつていく心を失つたという言葉に共感を持った。日本にはないものをカンボジアやスーダンの人々が持っている。聞いて感動した。



内藤さんの写真展「甦るカンボジア」から



【1面 入学記念行事 続き】
怒られた。私たちはせっ
かく学べているのに、
もつたいないことをして
いると思つた。また、他
国のいろいろな話をきい

て、日本について認識で
きた。
タジキスタンの人が
「タジキスタンが一つの
国として独立するとき、
日本が一番初めにタジキ



スリランカのディリュージャさん



タジキスタンのズパイドゥロさん

スタンを国と認めた。」
と言つていて、それすら
私たちは知らなかつたこ
ととか。
みんな国に誇りをもつ
ているのに、私たちは自
分の国の政治すら他人事
のようで情けない。

天津甘栗？

◆自分は中国人と交流を
し、今まで知らなかつた
ことを学んだ。
特に印象に残つてい

るのは、食文化のこと
で、天津甘栗が天津産で
はないことだ。天津から
大量輸入してきた栗を甘
栗にしたときにかつてに
「天津甘栗」とつけてし
まつたようで、それがメ
ジャーになったというこ
とだ。また様々な中国の
ことを聞くことができて
交流の楽しさを知ること
ができた。

**友達が増えて嬉し
かつた**

◆知らない人との交流は
すごくドキドキするけれ
ど、仲良くなれて友達が
増えてうれしかった。大
学という実感が少しわい
た。また皆と交流が持て
る行事があるといい。

**文化の違いが影響して
いる？**

◆私はブラジルのサミー
さんと交流しました。英
語なんて話せないし、不
安でしたが積極的かつ優
しく話しかけて下さいま
した。ブラジルについて、
知らなかつた文化なども
学び、興味がわきました。
また、実際にいろいろな
国の人が同じ「自己紹

介」をしても、長く話す
人、クイズ形式で話す人
など、性格だけでなく文
化の違いが影響している
のかなと思つた。
志賀ゼミが一位
◆私は志賀ゼミだったの
で1位をとれてとてもう
れしかったし、これが
きっかけでゼミの人と仲
良くなれた。また、新し
い友達がたくさんできて



ラトビアのリガさん

よかつた。

発表では、スリランカ
についてたくさんのこと
を学んだ。やはり、日
本と比べてみる機会が多
かつたので、日本につい
てもっと知っておくこと
が大事だと思ひます。
台湾に行つてみたい
◆先生や学生の普段み
れない一面がみれたり、
色々な人と話すことがで
きて、とても楽しかつた。
また、文化交流研修で
は台湾の人といろいろ話
う。

し、台湾の観光地や食べ
物を教えてもらい、台湾
に行つてみたいと思つ
た。
菓子が甘いフィリピン
◆フィリピンの食文化に
ついていろいろとお話を
聞き、調味料は日本とあ
まり変わらなかつたり、
菓子は日本より甘いなど
知ることができた。また
他の国についてもゼミご
との発表で知ることがで
き、よい機会だつたと思
う。



台湾の李仁哲さん (右)

アジアンボランティア サポート基金 IC-ANN

6月14日〜25日にわたり、アジアンボランティア・サポート基金の募金キャンペーンが行われました。現時点で7万円程が寄せられました。たくさんのご協力ありがとうございました。

この募金は毎年夏季休業中にカンボジアにて行われる「日本語・英語教育ボランティア」や、現地の学生の学業支援などのボランティア活動をサポートする目的で使われています。

また、一昨年はミャンマーの大洪水や四川省の大地震の被災者をサポートしたように、要望があれば様々な方向に援助をしています。学部や学科を問わず、学生、教員、聴講生などが呼びかけに参加。通称「ボラサポ」として活動の規模は広がっています。

募金活動と同時に、カンボジアで買い付けた商品も売っています。収益の一部は、ボランティアサポート基金の一部になります。



1号館ラウンジで募金を呼びかける



カンボジアで買い付けた品々

この活動に参加している現代英語学科2年次の木村紫絵里さんは「募金の呼びかけを通して、教員や友達など、気軽に募金に参加してくれる事が多く、嬉しいです。この活動の認知度が年を追うごとに高まってきているのを感じていてやりがいを感じています」と、募金の協力に感謝をしながら、カンボジアでの日本語・英語教育ボランティアに胸を膨らませています。

【編集部・佐々木】

学業優秀賞

.....受賞者の中から2名に勉強の秘訣を教えてくださいました.....

昨年度から、学生の学習意欲をさらに高めるとともに大学全体の活力を向上させることを目的として、「学業優秀賞」が設けられました。選考委員会によって学業が優秀な学生に賞が与えられ、卒業まで大学院生と同じ資格で図書館を利用できます。また、その中から一部の学生には今年度後期授業料が免除となります。

今年は、6月21日にキアラ館礼拝堂で授賞式が行われました。

もっと知りたい
という気持ち
文化交流学科4年次
高橋真生

私は、面白そうと思った授業を積極的にとりました。授業で得られる知識や、新たな発見を大切に、「もっと知りたい」という強い気持ちをもって、取り組んでいくことを心がけていました。レポートやテストは、自分のまとめたノートを読み返し、要点をまとめ、参考書と照らし合わせながら自分の意見をまとめていきました。

良い評価を得ようとする



笹沼さんと高橋さん

することも大切ですが、授業を通してどれだけ自分の見方や考えが変わったかが一番大切だと私は思います。授業の中に、自分の考えを変えてくれるヒントを探すことで、勉強がより楽しいものになると思います。

新しい何かを得る
文化交流学科4年次
笹沼綾乃

私は、1年生の頃から積極的に色々な授業をとっていました。その中でも興味が湧いた分野は、関連した授業も受けるように意識しています。

す。授業中に分からない語句や意味があったら、すぐに辞書や本で調べ、ノートにメモをしています。持ち込み可能なテストには、とても役に立ちます。

文化交流学科の授業は専門的なものが多く、一つ一つ個性があります。自分から進んで様々なものを受けてみることで、新しい何かを得ることが出来るのではないのでしょうか。私も残り少ない学生生活の中で、知識を深めていけたらと思っています。

文化交流学科の受賞者

2年次

伊東 愛理・国井 溪太・鈴木 望

3年次

井川 二美・国井 美紀・小池 夏子

4年次

浅野 千亜紀・笹沼 綾乃・高橋 真生

ICサポーター

ICサポーターは、入試広報部の仕事の
手伝いでもありますが、高校生にとつ
てのアドバイザーでもあり、ある意味
では大学の顔でもあります。

文化交流学科 4年次 浅野千亜紀

みなさんはキャンパス内
で高校生を案内してい
ませんか？ それはICサ
ポーターです。オープン
キャンパスやオープンク
ラスに参加してくれた高
校生をサポートする学生
のことです。 具体的な仕
事内容は、大学や学部・

学科について説明した
り、高校生からの相談に
対して学生目線でアドバ
イスを行ったり、学内施
設の案内や授業見学の同
行などを行います。

私がICサポーターにな
ったのは、高校生のとき
に参加したオープン
キャンパスがきっかけで
す。初めてのことで不安
だった私に、サポーター
の方はとても親切にして
くれました。その時お世
話になった先輩に憧
れて、大学に入学し
たら私もサポーター
をやりたい””と思い
1年生の時から活動
をしています。

先日、4年生にな
って初仕事のオー
プンクラスがありま
した。初めて10人以
上の高校生を他学科
の授業見学に連れて
行き、とても緊張し
ました。しかし、案
内をした高校生が笑
顔で帰っていく姿を
見ると、とてもうれ
しくやりがいを感じ
ます。

オープンクラスで
は、授業や大学施設
の説明も大事な仕事です
が、授業見学をする教室・
案内する施設までの移動
中に高校生と会話をし、
コミュニケーションを取
ることもとても大切な仕
事です。多くの高校生は
緊張しているため、参加
してよかった””と思っ
てもらえるように、話しや
すい雰囲気づくりを心掛
けています。

ICサポーターは、私に
とって大学生活の貴重な
経験の一つです。活動
を通して、コミュニケー
ション能力や説明力を学
ぶことができ、私自身の
成長にも繋がりました。
今後も積極的に活動をし
たいと思います。



オープンキャンパスで
は、授業や大学施設
の説明も大事な仕事です
が、授業見学をする教室・
案内する施設までの移動
中に高校生と会話をし、
コミュニケーションを取
ることもとても大切な仕
事です。多くの高校生は
緊張しているため、参加
してよかった””と思っ
てもらえるように、話しや
すい雰囲気づくりを心掛
けています。

ICサポーターは、私に
とって大学生活の貴重な
経験の一つです。活動
を通して、コミュニケー
ション能力や説明力を学
ぶことができ、私自身の
成長にも繋がりました。
今後も積極的に活動をし
たいと思います。

ICサポーターの活動に
は、オープンキャンパス・
オープンクラスの高校生
サポートの他に、入試関
係資料発送のお手伝いや
入試案内パンフレットの
取材協力などの仕事があ
ります。興味がある方は、
ぜひ入試広報部までよろ
しくお願ひします。学生
の私たちが大学・学科の
魅力を発信していきま
しょう。

文化交流学科コミュニティペーパー「rongorongo」では、

イベントの紹介やインタビュー、文化交流学科を中心とした学生の様々な活動の紹介をします。文化交流学科で活躍する学生や教員を紹介することを通して、多様な活動や出来事について知ることができると思います。

私たちも、初めは編集活動とはどのようなことをするかまったく分かりませんでした。藤田先生や先輩に基本的なことから教わり、仲間と協力してやっていく中で、やりがいを感じ、楽しくなってきました。

ロンゴロンゴ編集部では、週に1回程度会議をして記事の企画をし、各々担当記事を持って活動しています。「デザインすることに興味がある」「写真を撮るのが好き!」「雑誌の編集って気になるな〜」「多くの人と関わりたい」という方は、ぜひ一緒にロンゴロンゴを作っていきましょう!

3号館5階で活動しています。

ロンゴロンゴの編集に興味がある方、気軽にご連絡ください。また、感想や質問などもお待ちしております。

●編集部メールアドレス

rongorongo_hensyuubu-owner@yahoogroups.jp

●本紙WEB版はバックナンバーを含めて大学のHPでご覧になれます。

http://www.icc.ac.jp/univ/bunka/rongorongo/rongorongo1.htm

[編集部・松本 佐々木]

編集後記

もうすぐ、学生生活最後の夏休みです。が、今のところ特に予定もありません。せっかくの長期休みなのでどこか旅をしたいと思いが、資金面でも厳しそう。何か新しい事にでもチャレンジしてみようかと考えている毎日です。

〔笹沼綾乃〕

就職活動を続けています。スーツはとも暑いですが、就職活動を通じて、以前よりも気持ちの切り替え方や辛いことにも負けない精神力がついた気がします。

振り返ると、4年間はずっともはやい。自分のやりたいことに挑戦してみてください。私も悔いのないように夏休みや学祭を楽しみます!

〔佐々木美和〕

ロンゴロンゴとは南太平洋ポリネシアのイースター島で音作られていた「物を言う板」です。この板には文字のよなものが書いてありまして、この文字はまだ解読されていないそうです。これは島の人々に歴史や情報を伝える板でした。